

## 皆さんは 自分を 知っていますか？

皆さんはそれを摂取できるので  
から幸運です。しかし、その運は  
各自の姿勢がないと、享受できな  
いものなのです。

### 授業を 上手く活用しよう

今までの勉強と違い、大学での  
勉強はほとんど自由です。自分か  
ら進んで求めていかないと、身に  
つけることはできません。そこで、  
積極的に先生方に求める事で、実  
に多様な考え方や専門的視野を伝  
授していただけるのです。その為  
には、今まで行ってきた知識習得  
段階は授業の前に済ませておく  
という事、つまり、予習です。これ  
を怠ると、先生方が使っている言  
語が理解できない事になり、せ  
っかく独自の「考え方」を伝授し  
てくださるのに、半分も学べない  
こととなります。そして毎回の授  
業の中で、1つは興味を持つよう  
に意識することです。積極的に、  
何かしら持ち帰ってやろうという  
意識を持つ事が大切です。そして、  
授業が終わった後から、自分の  
勉強が始まります。興味を持った  
分野を、更に他の書籍で情報を  
得る、または行動を起す等の体  
験で学び、そこから考える事が  
はじまるのです。「考える」とい  
うことは、自己体験という、積  
極的行動がなければ、深める事  
はできません。

WAKABA  
NAKATA

## 中田 妙葉



経済学部講師。

中学の時に1年間台湾で生活する。  
とても暑かったが何故か楽しく、中国  
語の音の美しさと料理の美味しさ多  
様に惹かれた。今度は本場の地へ、と  
中国へ赴くが、その文化に驚愕。暫く  
戸惑っていたものの、理解できない不  
思議さに惹かれるまま、十数年北京に  
居ってしまった。目下、中国白話小説の  
日本文学への影響を思索中。

大学の勉強は今までと何処  
が違うかという、今までの  
知識習得を済ませて、考える  
という事を身につけていくの  
だという事です。もちろん、専  
門を履修していくには、その  
基礎を学んでいかなければな  
りません。また、広い視野を養  
うための科目もあります。それ  
らを学んでいくためには、ま  
ず知識を身につける必要があ  
り、それを覚えるという第一  
段階は、今までの勉強と変  
わることはないでしょう。し  
かし、それから先は、多くの  
可能性にあふれています。学  
習した事柄を煮るも焼くも、  
皆さん次第ということです。  
つまり、「どのように考えてい  
くか」という段階が待っています。

### 考えるということは、 自分を知るということ

考えるという事は、「自分を見  
つめ、自分を知る」という作  
業です。同じ事柄でも、見方  
によっては180度異なる考  
え方になりますが、それは感  
性の違いから様々な考え方  
となるのです。私は考える  
というのは、感性を磨くこと  
だと思っています。皆さんが  
感性を磨けるよう、本学の  
先生方はそれぞれ、今まで  
何十年と培ってきた学識・  
哲学を、授業で伝えてくださ  
います。



事に対して余裕ある見方を生み出すのか、興味が尽きませんでした。

もちろん、このお二方の先生は他の学生にも慕われておられましたが、皆、卒業論文の指導をお二方をお願いする事はありませんでしたし、私ほど強く心に残る事もないようでした。つまりこれが、各個人の感性の違いです。そして、私は、当初予定していた6年間の中国滞在を、学部を卒業しても、結局、更にその倍以上の期間を中国で過ごすことになったのは、この先生方の授業から、文学の楽しさを感じた事と、大きく関係しています。そして中国人の考え方に深い興味を覚え、古代白話小説を専攻するようになりました。

### 一期一会を大切に

面白いのは、大学での勉強は昔の事であったり、論理的であったり一見皆さんの生活と関係なさそうでも、間接的に社会と関わっているということです。今、社会経験のない皆さんには、理解できないかもしれませんが、色々と体験していくうちに、ストーンと納得できる事も多くなっていくと思います。つまり、皆さんが自ら積極的に体験する事で、教えられた事を理解でき、考える事ができます。するとまた、新たな知識を必要と感じてくるはずで、考えることは、知識という材料が多ければ多いほど、多様性が出てきます。また、皆さんが考えた事を投げかけられた時は、私にも大きな触発となります。こうした切磋琢磨の場が、大学という所です。どうか皆さんも、人なり、事柄なり、書物なりの一期一会を大切にしてください。そして、新たな自分を絶えず見つけ出し、発展させていける事を、切に願っています。

### 自分の感性を見つけ出せ

私は「大学は思考方法のデパート」だと思っています。その様々な考え方や感性は皆さんの感性を触発し、各自、己の感性を知ることができるのでしょ。

では、私はどうだったのかというと、皆さんとは異なる中国文学を専攻していました。素晴らしい先生方ばかりでしたが、特に心引かれたのは、お年を召した先生の中国古代詩の鑑賞でした。今でも臉に焼き付いているのは、唐の詩人王維の『使至塞上』の詩を説明されたときです。これは今の蒙古という茫漠たる辺境の地での勤めの寂しさを詠ったものです。詩の情景が雄大であればあるほど、作者の孤独は深みを増して行きます。詩をお詠みになった先生の瞳には、うっすらと涙がおおっていました。何を心に浮かべていらっしやっただのかは想像しようがありませんが、その先生の情感と共に詩人の気持ち、私の心に伝わるのを覚えました。不思議と先生が鑑賞されると、それぞれの詩に息吹が吹き込まれ、私の心に染透っていきました。授業後、その素晴らしい感覚を少しでも留めたくて、毎回現代中国語訳をしていました。しかし、その訳が正しいのかどうか不安で、先生にお願いすると、先生は快く一つ一つ丁寧に添削してくださいました。今、中国古代詩ではなく、中国古代小説の分野を専攻していますが、古代に関心を持つようになったのは、まさしく先生の情感に強く心打たれたことに他なりません。

古代小説になったのは、これも先生との出会いです。先生は小説の事件や人々の感情を、とても巧みに、私たちの現代社会状況に移し変えて説明なさいました。過酷な状況も、味わい深くお話されるさまは、先生のお人柄の奥深さを感じました。どの様な考え方が物